

医学教育シリーズ

2023年度近畿大学医学部ベトナム研修プログラムに参加して

原 理 紗¹ 寺 田 友 香²

¹近畿大学医学部医学科5学年

²近畿大学医学部医学科4学年

1. はじめに

2024/3/10～2024/3/23の期間で海外研修プログラムに参加し、私たちはベトナムのホーチミンにある小児病院と産婦人科病院で研修を行った。研修はVietnam National Universityの5年生が行っている臨床実習に参加し、病院実習以外の時間はホーチミンの散策を行った。病院をはじめとして市内散策においても文化や国民性など様々な点において日本と大きく異なることが大きく刺激的な2週間を過ごすことができた。そこででの経験や感じたことを以下に記す。

2. 研修について

3/14～3/19はChildren Hospital1で研修を行った。病院に到着すると驚きの連続であった。まず一番に驚いたのは人の多さである。とても広い敷地に大きな病棟がいくつかあり、その病棟内の廊下では子供やその家族がひしめき合い、一つの病室内には10を超えるベッドが所狭く並んでいた。そして敷地内には遊園地や公園にあるような遊具があり子供たちが自由に遊んでいた。日本と違う景色がひろがっており、これからどのような経験ができるのかと胸を躍らせながら実習を開始した。小児病院では感染症と血液内科を中心に見学させていただいた。感染症では髄膜炎や手足口病を、血液内科ではITP、サラセミアの患者を診た。学生は一人当たり3～5人の患者が割り当てられており、その患者の入院後経過や病棟での診察を行っていた。そして症例に関して班員と先生に症例検討会という形で症例を共有していた。この実習形態は我々の実習と似ているが大きく違ったことは生徒の患者へのかかわり方である。生徒はまず朝一番に担当患者の状態を確

認しにいき、また日中も病室に訪問し積極的にコミュニケーションをとり、診察をしていた。患者について深く理解しており、私たちにも非常に熱心に説明してくれた。学生という立場にとどまらずチーム医療の一部となっている印象であった。

残りの日程は産婦人科病院での研修であった。こちらは政府の許可が下りずに実習内容が縮小されてしまい非常に残念であったが病院内の様々な施設や部門を見学させていただいた。外来では1つの机で2人の患者の問診をしたり、診察室では処置が終わるとすぐに次の患者が入って来たりしていて、プライバシーの観点で国民性の違いを感じた。そして産



廊下で行われる問診

婦人科病院での実習の中で特に有意義な時間であったのは中絶に関するディスカッションとジャーナルクラブである。中絶のディスカッションでは実際の症例をもとに制度や教育の在り方にフォーカスされた内容であり、私たちは日本での状況を説明したり、自分の意見を述べたりした。しかし日本の制度について詳しく知らず自分の知識の少なさを痛感し、意見を述べる際に英語能力の不十分さを痛感した。またジャーナルクラブではHPV ワクチンと子宮頸がんの関係についての論文を取り扱い、各セッションに生徒が割り当てられ、論文をまとめてパワーポイントを作成し発表するという内容であった。私たちもパワーポイントを作成して発表を行った。発表後は先生の質問をもとにしてディスカッションを行ったのだが、医学論文を読みながおらず、なぜこの論文はコホート研究を用いているのか、やグラフや研究結果の読み取り方などについての問いに苦戦した。

3. 放課後・休日

放課後は主にその日に習った内容の復習や次の日の予習に充てた。学習した疾患の日本での発生状況や治療法を調べて比較したり、ベトナムではどのよ

うな特徴や問題点があるのかを考えたりした。その結果、疾患についてより深く学ぶことができ、次の日の実習に活かすことが出来た。また新たな診療科を見学する前日は、その診療科に関する英単語を事前に学習したり、ベトナムで流行っている疾患について調べたりした。予習をしておく、先生や学生の話が理解しやすく、そのことはとても役に立った。そして、(2)に述べた産婦人科実習でのジャーナルクラブに参加するために、英語の論文を読んで、スライドを作る課題にも取り組んだ。初めてのことで戸惑ったが、メンバーとともに頑張り、とても良いスライドが完成して自信に繋がった。さらに、放課後に時間がある時は戦争証跡博物館に行ってベトナム戦争について学んだり、散歩をしてホーチミンの街並みを楽しんだりした。戦争証跡博物館では、実際にホルマリン漬けにされた奇形児や奇形児の写真を見て、大量に撒かれた枯葉剤の悲惨さを目の当たりにした。

休日はメコン川クルーズに参加した。東南アジア最長のメコン川で日本では体験できない豊かな自然を存分に感じた。メコンデルタに浮かぶ島々では、ココナッツキャンディー工場やはちみつ農園などを見学し、南国の豊かな自然と文化を感じた。

4. 総 括

2週間という短期間の研修であったが、日本では経験できないことをたくさん経験できた。以上に挙げたように日本とベトナムでは医療提供体制や病院のシステム、環境が全く異なり、日本の医師は、それに比べるととても快適な環境で働くことができていると感じた。それに感謝して実習をしたり、働いたりしなければならぬ。また、(2)でも述べたがベトナムでは医学生も医師と同じように働いている。私は自大学の実習では指示されたことを行って満足していることが多くっており、今回出会ったベトナムの学生のようにもっと熱心に取り組まなければならないと感じた。そして身近な学生だけをみて満足するのではなく、視野を広げて海外の学生にも負けぬように努力したいという気持ちが強くなった。学生のうちから、このような熱心な姿勢を身につけておくことは、医師となった時とても役に立つと思う。またベトナムの学生や医師はベトナム語が母国語であるにも関わらず、全員が英語を流暢に話していた。医師として働く上で、英語の論文を読んだり、海外の方と英語で交流したりすることは必要不可欠である。自分の気持ちを表現するうえで英語がうまく出てこずに悔しく思う場面が多々あった。



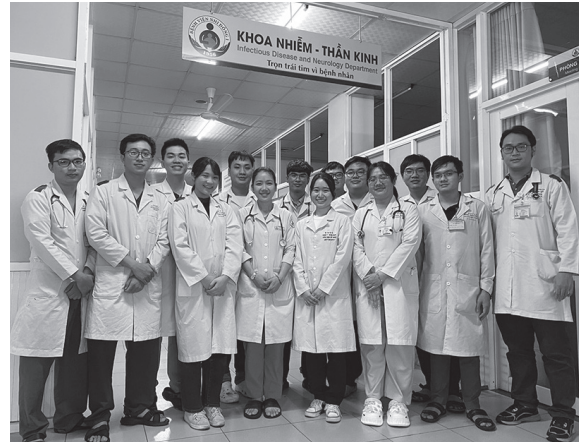
学生とのランチ会



journal club での発表

帰国後も英語の能力ももっと向上させるため英語学習を続けようと強く思った。

以上のように、ベトナムへの海外派遣では本当に貴重な経験をする事ができた。このような経験ができたのは Vietnam National University の先生と調整をしていただいた藤田先生や学務課の東さん、現地であらゆる面でサポートして教育していただいた Tuan 先生、また近くで寄り添って説明や手助けしてくれたベトナムの医学生のおかげであり、ここより感謝申し上げたい。この経験を生かして今後の日本での臨床実習に取り組み、医師となった暁にはこの経験を思い出して、自分の理想とする医師になれるよう精進したい。



感染症と一緒に学習した先生と学生